

ベリーズ隊員活動報告

伊藤 真梨子

(16-1, ベリーズ, 音楽, 神奈川県立鎌倉養護学校)

1 ベリーズについて

ベリーズは中米に属し、ユカタン半島の付け根に位置するカリブ海に面した国である。メキシコとグアテマラに接し、面積は日本の四国ほどである。1981年にイギリスから独立したが、現在もなおグアテマラはベリーズを認めておらず、グアテマラの地図にはベリーズは存在していない。人口は2004年の統計で27,3万人、首都はベルモパン、中米諸国では唯一、公用語を英語とする国である。しかし言語は多様で、英語のほかにもスペイン語、英語が訛ったクレオール語、マヤ語、ガリフナ語など様々な言語が話されている。また、それと同時に人種も多様で、メスティーソ、クレオール、マヤ、ガリフナ族などに加え、最近では台湾や中国からの移民も多くなっている。宗教はカトリックが大半を占めている。通貨はベリーズ・ドルで1米ドル=2ベリーズ・ドルの固定制。1999年に青年海外協力隊派遣取極、2000年から派遣が開始され、2006年7月現在、18名の隊員が活動している。主産業は、砂糖、バナナ、柑橘類などの農業であるが、最近では観光業などの比重も増加している。内陸にはマヤ遺跡も点在しており、先住のマヤ民族が昔ながらの生活を受け継いでいる。沿岸部ではカリブ海に浮かぶバリアリーフが世界遺産となっており、ダイビングスポットとしても人気が高い。

2 配属先での活動

(1) 配属先の概要

配属地はベリーズ最大の都市であるベリーズ・シティで、ハリケーンにより内陸部のベルモパンに遷都されるまで首都であった都市である。配属先はSt. Joseph. R. C. Schoolというローマ・カトリック系の学校で2006年1月現在、生徒数は約1100人(計33クラス)、教員数は39名と国内でも有数の大規模校である。学年は全8学年あり、幼稚部にあたるInfantが2学年と小学生にあたるStandardが6学年ある。Standard3までがクラス担任制で、Standard4からが教科担任制となっている。ボランティアは青年海外協力隊が自分を含め2名(美術と音楽)とアメリカのPeace Corp(平和部隊)が1名活動していた。

(2) 要請内容

要請内容は「現行の教育システムでは情操教育に重きがおかれておらず、体系的な指導が行われていないので、小学生へのデモンストレーションを通じて生徒が音楽に

親しみ、現地教員が音楽指導法を学ぶことを支援する。」というものであった。まずは音楽の授業で子どもたちへの直接指導を行い、音楽科授業が定着することを目標として活動した。

(3) 音楽科授業の実施

配属当初の授業時間数は8クラス/週しかなく、音楽科授業の定着には程遠いものであったため、校長と相談しながら徐々に授業時間数を増やしていった。また、授業時間についても子どもの年齢と集中力を考慮して、低学年については他の教科とは異なる時間割(30分という授業時間)で授業を行えるように時間割を改善していった。その結果、2年目は19クラス/週を受け持つことができるようになり、より効果的に授業を進められるようになった。(下図参照)

Music Time Table(2005~2006)

Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
9:00 ~ 9:30	Infant1-1	Infant1-2	Infant1-3		Infant1-4
10:15 ~ 10:45	Std1-1	Std1-2	Std1-3		Std1-4
11:00 ~ 11:30	Infant2-1	Infant2-2	Infant2-3		Infant2-4
13:05 ~ 13:50		Std5-4		Std2 (13:05 ~ 14:20)	Std5-1
13:50 ~ 14:30		Std5-3			
14:40 ~ 15:30		Std5-2		Std3 (14:30 ~ 15:30)	Std5-5

以下、実際に行った授業内容について4分野(歌唱指導・器楽指導・音楽鑑賞・音楽理論)に分けて述べることにする。

① 歌唱指導(手遊び歌、マーガース、日本の童謡など)

歌唱指導については低学年を中心に、身体運動を伴った歌(手遊び歌)やマーガース、日本の童謡などを扱った。歌うだけではどうしても集中力が持続できないので、体を動かしたり振りをつけたりして子どもたちが飽きてしまわないように工夫をした。日本の童謡は、日本語の歌詞を英訳して教えたが、「かえるの歌」(Frog Song)や「とんでったバナナ」(Banana Song)がその中でも子どもたちに大好評であったのは、生活に密着した親しみやすい内容であったからだと思う。他にも「うみ」(The Ocean)

や「アイアイ」(Monkey Song)、「ぞうさん」(Elephant Song)などを紹介したが、様々な童謡を英訳することで日本の童謡の持つ素晴らしさ(題材の多様性、歌詞の美しさなど)を改めて実感することができたのは、私自身にとって大きな収穫であった。

② 器楽指導(リコーダー、ピアノ、打楽器)

配属当初、学校には楽器類などは一切なくピアノもなかったため、教頭先生から指導用のキーボードを借りて歌唱指導を主に行っていたが、リコーダーが比較的安価で手に入ることがわかり、中学年を中心にリコーダーの指導を始めた。リコーダーを持ってこなかったり、持ってきてもふざけて吹こうとしなかったりする子どもも多く、歌唱指導のような一斉指導を行うのがなかなか難しかったが、根気よく教えることで吹けるようになる子どもが増えてきた。その後、日本からの寄付によりピアノや打楽器類をいただき、器楽指導の幅も広がったと思う。器楽指導は、ある程度その楽器が習得できるようになるまでに指導者、子どもたち双方に持続力と集中力が必要である。しかし、子どもたちは楽器への憧れはあるのだが集中力や忍耐力が養われておらず、すぐに飽きてしまうのでそれが最後まで悩みの種であった。子どもたちの多くは楽器を使うのが大好きで、クラス全員で一度に使うのに十分な楽器はあったのだが、大きな音が他のクラスに迷惑になるという環境上の問題と、子どもたちのコントロールができなくなるという指導上の問題から、当初私が目指していたクラス全員で合奏するということは残念ながらできなかった。クラス担任の協力と理解が得られ、子どもたちが楽器の扱いに慣れてくれば(丁寧に扱えるようになれば)可能ではないかと思うので、後任の方に期待している。

③ 音楽鑑賞(クラシック音楽、歌詞の聴き取り)

様々な音楽を聴く経験を持つという目的で、普段あまり聴く機会のないクラシック音楽を鑑賞した。ルロイ・アンダーソンの「踊る子猫」やチャイコフスキーの「くるみ割り人形」といった親しみやすい曲を選び、音楽を聴きながらストーリーを考えさせたりした。また、鑑賞とは少し離れるが、歌詞を穴埋めにしておいて聴きながら書き取る、ということも行った。曲の流れに乗りながら単語を聴き取ることが苦手な子どもも多く、スペルミスをする子が意外と多かったのに驚かされた。

④ 音楽理論(音名、音符の種類など)

音楽理論については、どの程度教えるべきか悩んだ時期もあったが、理論よりもまず歌ったり演奏したりという実体験から音楽を楽しんでもらうことが大切だと思い、あまり理論に深入りすることのないよう、音名(ドレミ…)や音符の種類については紹介程度に扱った。また、実際の楽器を見せることはできなかったが、楽器カードを使って様々な楽器の名前を覚えたりCDでその音を聴いたりした。

(4) 授業外での取り組み

① Festival of Artsへの参加(2005, 5)

毎年5月から6月にかけて行われる芸術祭に参加した。音楽の発表の他にも演劇やダンスなどのステージ発表と美術作品の展示があり、ベリーズ・シティ地区の十

数校の学校が参加して2週間ほど行われるものである。子どもたちから応募を募り、オーディションをして合奏と歌唱の2団体で参加した。放課後の練習になかなか集まらなかったり、途中で練習を止めてしまう子もいたりしたが、無事発表を終えることができよかったと思う。

② 卒業式での演奏(2005, 6)

卒業式では、芸術祭に参加したメンバーから、さらに選抜した子どもたちによるリコーダー演奏を企画した。子どもたちや教員だけでなく、保護者や地域の人々に私の活動をアピールする良い機会になった。

③ 夏季休業中(7月～8月)の活動

2ヶ月間の夏休み中には、現地の音楽講師による Music Work Shop(研修会)に参加したり、他の音楽隊員と協力して Music Text Book を作成したりした。Work Shop は現地教員に対する指導方法を学ぶという点で大変参考になった。Music Text Book は他2名の音楽隊員と相談し、子どものための教科書というだけではなく、教員が見ても参考になるような指導書としても対応できるようなものを作る、という目的で作成した。同じ音楽隊員と協力したことで、内容的にも充実した Text Book を作ることできたと自負している。ページ数が多いため、それぞれの配属先に1部ずつ配布したが、配属先での Music Work Shop ではその中から抜粋して、資料づくりに役立てることができた。

④ 世界の笑顔プログラム(2006, 9)

活動1年目は、楽器類の不足が問題点の一つにあり、楽器指導を充実させることは難しかったが、2年目に入り「世界の笑顔プログラム」の寄付により、ピアノやリコーダー、打楽器類などが大量に手に入ったことで、楽器指導を効果的に進めることができた。また、後述する Music Club を開いたり、教員への楽器指導をしたりすることができたと思う。

⑤ Music Club(Wed.&Fri. 2006, 9～)

普段の授業の中では、個々の子どもに対して時間をとって楽器を教えるのは困難であるが、Music Club では一人ひとりに時間をとって指導をすることができ、楽器習得の成果が一番上がったのは Music Club に参加してくれた子どもたちであると思う。そのため、後述する教員向けの Music Lesson では、教員への指導の協力を子どもたちにお願したときもあった。子どもの方が新しいものを早く吸収する力もあり、それだけ楽器を習得することも早いと実感した。

⑥ Music Work Shop の開催

配属先の教員に対して研修会を2回行った。授業方法を身につけてもらうというよりも、私が行っている活動を分かってもらうという目的で、音楽理論やテストでの評価方法、授業内容を模擬授業形式で紹介したりした。

また、活動終了直前の時期には、隊員が活動している地方都市の小学校からの要望により、他の音楽隊員と共に Music Work Shop を開催した。模擬授業、歌唱指導

の方法などを中心に紹介したが、どのような目的を持って私たちが音楽の指導をしているか、という思いを伝えることができたし、また一方で私自身の活動を改めて見つめ返す良い機会になったと思う。

⑦ Music Lesson for Teachers

前述した Music Work Shop のなかで教員に対する楽器指導をして欲しいという要望があり、それをきっかけにして教員向けの Music Lesson（ギター、キーボード、リコーダー）を始めることになった。音楽に興味を持っている教員が思っていたよりも多いことに驚かされたが、音楽科指導に対する意欲の高い教員のおかげで、私自身もずいぶん勇気づけられた。

⑧ Christmas Program

毎年クリスマスの時期に行われる学芸会で、Music Club の子どもたちの演奏を企画した。また、よさこいソーランを隊員と踊り、日本文化紹介をした。

(5) 問題点と課題

ハード面として音楽という授業の性質上、教室の環境が問題となっていたのだが、教室訪問型から移動教室型(子どもたちに音楽室に来てもらう)に移行することで周囲への配慮にそれほど神経質になることなく、授業が進められるようになった。

ソフト面では、一斉授業の難しさというものが常に自分の悩みとしてあり、一斉授業はベリーズでは無理なのか、自分の英語力、指導力不足が原因ではないかと思い悩んだ時期もあった。日本の学校では一斉授業が当たり前のように行われているが、ベリーズではあまり馴染まないのではないかと、私自身の考え方を変えなければいけないのではないかと感じ、自分のやり方を押し通すだけではだめで、もう少し長い目で、違う視点で考えてみようと思ったとき、授業を聞かない3分の2の子どもたちのためにできる課題を考えようとか、集中力を持続できるような授業の工夫をしようなど、前向きな考え方ができるようになったと思う。

ベリーズという国民性も関係するのかもしれないが、授業以外でも普段の子供たちの様子を見てみると、一つのことに集中できなかつたり、落ち着きがなかつたり同じことを何度も注意されていることが多く、この集中力と聴く力は子供たちにとって必要不可欠なものだと感じている。またこの2つの力は相互に関係するもので、集中力のある子は人の話も聞くことができ理解力も早いですが、逆に聴く力が育っていない子は集中力も散漫であるといえると思う。この2つの力を育てるために、器楽の習得を通じて忍耐力や集中力を育てたり、友達のパフォーマンスや教員の説明を聴いたり、様々な音楽に耳を傾ける態度を育てることが大切であると感じている。

(6) 音楽の授業の目的

1年と9ヶ月の活動を行ってきた中で、ベリーズにおける音楽教育の目的とはどのようなものか考えてみたので以下、記述する。

① Play（遊ぶ、演奏する）から Perform へ

器楽指導では楽器を扱ううちに遊びに走ってしまったり、ふざけたりしてしまう

子ども少なくなかった。Play と Perform 同じ「演奏する」という意味合いを持つ単語ではあるが、楽器を学ぶということは、Play(遊ぶ)ではなく Perform(自分の演奏を相手に聴かせる、という姿勢)するという意識を持たせることが大事であると感じている。

② 相手の Performance を聴く態度を育てること

Perform するという姿勢が大事であると同時に、相手の演奏に耳を傾けるという姿勢も重要であると思う。子どもたちの多くは前に立って歌ったり演奏したりすることが大好きであるが、それを聴く態度が育っていないように感じる。教室の環境面の問題もあるが、なるべく静かな空間で音楽の授業を行える状況が作ればよい。

③ 器楽指導を通して忍耐力、集中力を養うこと

ベリーズの国民性や文化、気候等による影響も大きいかもしれないが、多くのベリジアンはひとつのことを根気強く行う忍耐力とそれに必要な集中力があまり備わっていないように感じる。器楽指導においては、習得のためにある程度の継続力や忍耐力、集中力が重要となってくるので、音楽の授業の中でそれらの力を養うことのできる効果は大きいと感じている。

④ 努力することの大切さを知ること

前項に関係するが、ある物事を習得するためには、毎日の積み重ねが大事であるということを知ってもらいたいと思う。子供たちも教員も、楽器を弾けるようになりたいという気持ちはとても強く持っているのだが、上手にできなかったり難しいと感じたりしたときに途中であきらめてしまうことが多いので、この大切さを是非分かってほしい。そして努力してうまくいったときには、さらに音楽の面白さを実感できるということを知ってほしいと考えている。

⑤ 友達と協力して一つのを創り上げたときの感動や達成感を味わうこと

学校における音楽教育の醍醐味は合唱や合奏の活動を通してクラスや仲間と一体感を感じるのだと思うので、Festival of arts やクリスマスプログラムなどの行事を通して様々な感動体験をして欲しいと思う。

(7) 活動を振り返って

私の全活動を振り返ってみると、子供たちの笑顔や現地の先生方の協力なしではありえなかったと実感している。本当に子供たち、先生たちに救われた1年と9ヶ月であった。時には、活動が思い通り進まないことでイライラしたりすることもあったが、現地から学ぶ姿勢や謙虚さ、そして忍耐力と同時に自分をアピールしていく厚かましさも必要だということを知ることができた。また、失敗を繰り返しながらも新たな気持ちで音楽の指導について試行錯誤できることはとても幸せであった。

また、私がベリーズという国について一番素晴らしいと感じていることなのだが、様々な文化、民族の人々が対立することもなく干渉しすぎることもなく、暮らしているという点がある。学校のクラスの中にもクレオール、メスティーソ、ガリフナ、タイワニーズ、チャイニーズと様々な民族があふれているが、それぞれ得意な分野（歌

や楽器)は違うし、好きな音楽も様々なのだが、その中に多様性の素晴らしさを感じると同時に、「みんなちがってみんないい」という言葉がぴったりくるような気がしてくる。音楽にとって多様性や個性は大事な要素であるし、それがまとまったときと音楽のパワーはとても大きいと思う。ベリーズで活動期間を全うすることができて本当に良かった。

(8) 最後に…最近思うこと

活動を終えて帰国してから考えるようになったことを以下述べたいと思う。

帰国直後、めまぐるしい情報の変化や情報量の多さについていけない自分に愕然とした。しかしそれと同時に、情報に振りまわされず、情報を取捨選択できる自分の意思を持つことが大切なのではないかと最近考えるようになった。また、日々生活していて当たり前と思っていることについて当たり前と思わずに考えてみたり、疑ってみたりすることも大事であると思うようになった。2年弱、日本を離れていただけだが、このような考えを持つことができるようになったことは私にとって大きな収穫であると思う。

最後に、国際理解ということについて。最近、国際社会に目を向け、他国のことを理解することが大切だとよく言われているが、それ以前の問題として、自分の国について知り、自慢できることや熱く語れることを持つことが必要ではないかと思う。実際、私が任地で活動していた様々な場面で、もっと日本のことについて現地の言葉で話せるようにしておくべきだったと思うことがよくあった。まずは自分の国についてよく理解を深めた上で他国に目を向けることが大事であり、それが国際理解の第一歩につながるのではないかと思う。国際理解とは、異なる文化や生活、環境を持つものどうしが理解しようという姿勢を持ち、共感しあえたときに生じる心のやりとりではないだろうか。

